学校だより
かがやく子
令和7年10月24日
滑川市立寺家小学校

「こだまする大人に」

自分に子供ができると、途端によちよち歩きの子や親に抱かれた子のことが気になりだすと言われています（自分自身、２０年以上も前の話になりますが）。その子を見ながら、自分の子供のことを思います。見比べて「自分の子供の方がかわいい」などと失礼なことを思っていることさえありました。「恋は盲目」ではありませんが、親や祖父母の子に向ける愛も、どうしても盲目に陥りがちになります。

よく大型ショッピングセンターの駐車場等で、親子や子供連れの祖父母を見かけます。あるとき、まだ周りの様子もしっかり把握できない年齢なのに、子供の手を離して先に歩かせている家族がいました。周りに車は動いていないというものの、見ている者までハラハラするような状況でした。そのうちに、その子が駐車場の脇にある少し大きめの石につまずいて転んでしまいました。その子は当然大声をあげて泣き、助けを求めます。親もあわてて駆け寄り、その子を抱き起こしました。そして、その時、子供にかけた一言が、私には気になって仕方がなかったのです。「あれぇ、誰かいね。こんなところに石置いたんは」の言葉に、私は少し違和感をもちました。私たちもよくそれと似たような言葉を、子供に向けて発することがあるような気もします。しかし、物心つかないうちはいいかもしれませんが、少し大きくなるまでそういった類の言葉を続けていると、子供はきっと「いつも相手や周囲が悪い。自分は悪くない。」という育ち方をしてしまうと思うのです。もちろん、善悪の判断がつかず、周囲の状況を把握できない幼児には自分を省みることをさせなくてもいいと思いますが、「転んで痛かったね」「けがしなくてよかったね」と痛みや辛さに共感したり、無事を喜んだりした後には、「でも、これからは大きな石がないか、気を付けて歩くようにしようね」と注意を促すことが大切なような気がしました。

また、こんな話も何かの本で読みました。治療のために我が子にお灸をすえていた時のことです。子供がじっとしていないので、お灸が転げ落ちて服を焦がしてしまったそうです。そのお母さんは、「何しとんがけ。服、焦げてしまったねか」とは叱りませんでした。それどころか「ああ、あなたの体に落ちなくてよかった」と我が子を抱きしめたそうです。こんな風に言ってもらえる子供は幸せですね。「あなたを愛している」と、ことさら言わなくても、自分が愛されているということがいっぺんに体に染み込んできます。何か事が起こった時の声かけをおろそかにできません。

さて、早いもので２学期も折り返しとなります。日々、大切な子供たちへの声かけを大切にしながら、教職員一同取り組んでいきたいと思います。

保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、いつもご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。（校長　村杉　一也）